

桜、桜そして桜

稲宮 健一

新学期、入学式、入社式、それを祝うように桜の満開、わくわくしながら春に新しい人生が走り出す。昔から花と言えば桜、美しさとはかなさ、しかし、今は染井吉野に囲まれた春爛漫を肌身に感じる独特な季節感が格別に心持よい。

家内のご近所ネットワークで、国立新美術館で面白い美術展がお勧めとのことで、乃木坂に赴いた。ダミアン・ハースト (Damian Hirst) の「桜」展に入場した。広い会場が大きく三つに区切られ、各区切り毎に壁面全部に一辺が身長の倍ぐらいの大型のキャンバスに彼が主張する桜が描かれている。壁の四方にハーストが描く大きな満開の桜がこれでもか、これでもかと見る者に訴えてくる。次の区切りも桜、桜、桜色で溢れている。

ハーストの表現方法はバケツに溶かされた桜色のペンをぶっ太い刷毛で、ぼて、ぼてとキャンバスに叩きつけるような描き方だ。近くで画面を見ると、握りこぶしぐらいの桜色の塊が無造作に落書きのように張付いている。しかし、少し離れて区切りの中央に立つと、紛れもなくあの満開の桜に包まれている開放感が滲み出てくる。千切り絵の山下清はこじんまり、小さな画面に几帳面に張り紙で描くの比して、ハーストは大画面に大胆な描き方だ。離れて見ると、紛れもなく満開の桜に包まれている雰囲気が出て、ここが美術館の中でなければ、真中で花見の宴を持つてもいいような親しみのある空間を感じる。

画面の大きさから来る迫力では秋田で藤田嗣治の「秋田の行事」を見た時の感動を思い出す。高さ四m弱、幅二〇mの大画面は展示室の後に下がって眺めてはじめて画伯の訴える画力が感じられる。また、満開の桜の表現では小布施町の中島千波の桜も圧巻だ。中島の桜は和室に似合った桜で、満面の桜を実に丁寧に細かく忠実に微細なタッチで花びらや、枝ぶりを描いており、薄めの艶やかな桜色が特徴だ。趣向は違うが渋谷駅の壁面に飾られている岡本太郎のサイケデリックな色彩豊かな大画面の抽象画も大胆で迫力がある。